

大會抄錄

『肇域志』の成立——明末經世學の一側面——

大澤 顯 浩

顧炎武に『肇域志』という著作がある。『天下郡國利病書』と對を爲すものとされているが、鈔本でしか傳わっておらず、顧炎武の大部の著作では、唯一出版されていないもので、その内容はあまり知られていない。日本では東洋文庫に遼陽に關する部分の零本と京都大學人文科學研究所に臺灣國立中央圖書館所藏同治間鈔本の景印本がある。

『肇域志』の成立を考えるには、當時の經世致用の學問を無視することはできないが、「當世の務」を意識し、地方の利弊に關心を拂うという意味での經世致用を考えるとき、一定の主題を意識した時論の前提として現狀を知ることはいかに重要であつた。明代後期はこのような意味での通俗地理書が多く出版された時期であつた。

『肇域志』をこれらの地理書と比較してみると、『天下郡國利病書』とは異なる敘述のスタイルは、これらの地理書を念頭に置いたものであつたということが出来る。これらの特徴は名人や名勝、舊跡の紹介だけに重點を置くものではなく、より個別地域の現實を知ることとにあり、その性格は衝僻や繁隨という風俗や土産等の項目の掲載に端的に現われているといつてよい。その中に見える衝繁などの吏治に關する按語や里甲の數を素材として、『肇域志』の用いた史料

を検討することで明末の經世學の一端を探ることが出来るが、體裁の上からいっても顧炎武が『肇域志』で爲そうとした意圖は、明末の地理書に見られた體例をさらに整理し、明確に歴史地理の上に體系づける事であつたといえよう。

いわゆる「小高句麗國」の存否問題

古 畑 徹

ここで問題とする「小高句麗國」とは、日野開三郎氏が、唐・聖曆三（六九九）年から遼・神冊三（九一八）年までの間、遼東地區（遼寧省東部）に存在すると主張された、高句麗王の子孫高氏を王とする王國のことである（『日野開三郎東洋史學論集八・小高句麗國の研究』三一書房、一九八四、原載は『史淵』六三～一〇九、一九五四～七二）。氏は、高句麗滅亡（六六八年）以後に散見する「高麗」史料を巧みな論理で繋ぎ合わせてその國の存在を主張し、精緻な國際情勢分析を踏まえてその歴史を復元された。その國際情勢分析は特にすぐれ、『小高句麗國の研究』は東北アジア情勢を研究する際の必讀文獻といつてよい反面、肝心の「小高句麗國」については、多くの研究者が半信半疑で、未だその存在を積極的に認める見解は少ない。とはいえ、反論もほとんどなく、その存否問題があまりいままま手つかずになっているのが現狀である。

本發表では、このような現狀を打破すべく、まず日野氏が「小高句麗國」の存在を示すとされた史料を再検討し、その見解の問題點